

「神は、その独り子を・・・：愛すること」

ヨハネによる福音書 3章 10～21 節

今年も年度替わりの 4 月となりました。新年度というのはどこか これまでと違う何かが始まるようで、ちょっとした期待感がそこはかとなく漂います。イースターを 4 月に迎える今年のような年度は、特にそう感じられるのかもしれませんが。本年は、4 月第 2 週の 12 日（日）が主イエスの復活を記念するイースターとなっています。そのようなこのとき、それを内に迎えるすべての私たちのところで、なんとはなしの期待感が確かな希望へと変えられますように。どうぞ、恵み豊かな、良きイースターをお迎えください。

順を追って読み進めてきた「ヨハネによる福音書」は今月、あの 3 章 16 節を記す箇所となりました。聖書や教会にあまり馴染みのない方々でも御存じの、言ってみれば「聖書の中で一番有名な箇所」と言えるでしょうか。今月はそのところから、聖書の語りかけを御一緒に聴き取れたらと願っています。それぞれの「わたしの心に」響く語りかけを・・・。

ヨハネによる福音書は 3 章 16 節で、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」と宣言します。おそらく、聖書の中で最もよく知られた、どこよりも有名な箇所かと思われます。従来から、「小福音」と、すなわち「小さな福音」と呼ばれてきました。聖書が伝える良き音信を一言で要約したもの、という意味です。宗教改革者のルターは、「福音のミニチュア」という言い方をしました。「黄金の聖句の代表」という名も付けられています。さらには、すべての人のための聖句であり、世界中のクリスチャンが愛誦する御言葉でもあることから、「万人の聖句」といった呼び方もなされています。いずれにせよ、ヨハネ 3 章 16 節は「聖書の中の聖書」と言っても過言でない箇所と言えるでしょう。

ですが、誰もがよく知っているからといって、そのまま、誰もが皆 その重さを真実知っているかということ、必ずしもそうも言い切れない。よく知られているということはむしろ逆に、私たちは本当のところ、誰もその真実をよくは分かっていない、ということなのかもしれません。表現が分かりやすく、とっつきやすい。響きも温かくて、心地よい。その程度の感覚で、実のところ、その内実もその程度にしか受け止めていないのかもしれません。そうした言葉というのは実際、少なくないのではないのでしょうか。言葉というのは たしかに、その深みを探求し、そこでそれと格闘しつつ 自身の体重をかけて聴き耳を立てないと、その真実を理解することは難しいように思われます。言葉というのは本来、そのようにして初めて、一つひとつ 自分のもとのされてゆくのではないのでしょうか。

ヨハネ福音書の3章16節というのはまさに、そのような言葉の象徴のように思われます。そして、その意味するところに深く触れるとき、それは、日ごとに心揺れるこの私たちに向かって繰り返す「いつもここに立ち戻るように」と呼びかける、かけがえのない御言葉となるように思われます。

問題は、聖書の言葉の熱さを同じ熱さをもって実感する、ということではないでしょうか。ヨハネは宣言します。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。その核心は言うまでもなく、「神の愛」と言えるでしょう。根っこのところでキリスト教の信仰全体がそこにかかっているとも言える、そのような「神の愛」です。その愛とはいったい、どんなものなのか。どれほどのものなのか。事は、私たちがそれを聖書が語ると同じ熱さで、また同じ深さで受け止めているかどうか、受け止めているかどうか、ということのように思われます。

すでに一度、「1章1～18節(2)」のところで触れましたが、かつてベストセラーになった『大河の一滴』という本があります。作家の五木 寛之さんの本で、いまだにロングセラーになっているようですが、その中に、慈悲の「悲」との関連で、読む者に伝わる的を射た一文があります。こんな文章です。

<悲>はサンスクリットで<カルナー>といい、ため息、呻き声のことです。他人の痛みが自分の痛みのように感じられるにもかかわらず、その人の痛みを自分の力ではどうしても癒すことができない。その人になりかわることができない。そのことがつらくて、思わず体の底から「あー」という呻き声を発する。その呻き声がカルナーです。それを中国人は<悲>と訳しました。

仮にオウム事件のようなことがあって、息子が刑に服することになったとしましょう。慈愛に満ちた父親であれば、「がんばれ！ 自分の罪を償って再起して社会に帰ってこい。私たちはいつまでも待ってるぞ。一緒に手を携えて新しい未来に向かって歩いていこうじゃないか」と励ますかもしれない。では、古風な母親であったらどうか。「なぜこんなことになったの？ これからどうするの？」などと、問いつめるようなことはいっさい言わないだろう。ただ黙って、そばで涙を流して息子の顔を見つめているだけかもしれない。おまえがもしも地獄に墮ちていくんだったら 自分も一緒についていくよ、という気持ちで手に手を重ねてうなだれているかもしれない。

じつは こうしたことが人間の心の底にいちばん届くのです。がんばれと言っても効かないギリギリの立場の人間は、それでしか救われない。それを<悲>といいます。

私が「的を射た」と言ったのは、古風な母親だったら「おまえがもしも地獄に墮ちていくんだったら 自分も一緒についていくよ、という気持ちで・・・」という、そのくだりです。

自分が代わってやれないのなら、ならば 地獄にでもどこにでも一緒についていきたい、というその思いです。親としての情で、たしかに人間的な情ではあるものの、しかし そこには命懸けの思いが溢れていて、必死な熱さが感じ取れます。

その一方で、こんな例もあります。ある教会で、男性の教会員が「おり入って御相談があるのですが・・・」と、牧師室を訪ねてきたそうです。聞けば、妻がある身ながら、他の女性を好きになってしまったと言います。男性は事の子細を一通り話した後、「先生、どうしたらよいでしょうか」と尋ねました。すると、その牧師が答えて曰く、「両方うまくやろうなんて考えたら、それこそ不倫だよ。ただ、奥さんとの間に何か 結婚生活を成り立たせないような本質的な問題があって、しかもその女性のことを真実愛しているのなら、それはそれで考えなきゃなるまい。離婚は良いことじゃない。やはり、一つの罪と言わざるをえない。ただし、取り返しのつかない決定的な罪とも言えない。やり直しの余地がないわけではない。もし 君のケースがこれに当たるのなら、命懸けで、自分の命を捧げるつもりで事に向かうしかあるまい。誠実に奥さんと話し合い、すべてをきちんと整えて、その女性と結婚すべきだろう。いずれにせよ、本当に愛するとは、相手のために自分の命を捧げて死ぬことだろうと思うよ」。牧師の言葉を聞いて、男性の顔はしだいに厳しく、硬い表情になっていったといます。そして 結局、その男性は元の生活に戻っていったのでした。それはある意味で、自分がしようとしていることの重大さに気づかされて、家庭を壊すことなく事が収まり、幸いだったと言えます。しかしながら、一つ見方を変えれば、相談の男性は相手の女性のために命を懸けられなかった、死ねなかった、ということでもあるのではないか。その意味では、牧師の言葉に照らすなら、相手の女性を真実 愛してはいなかった、ということになるのかもしれませんが、ある種、五木（寛之）さんの「古風な母親」とは逆のケースと言えるでしょうか。

実は、この話にはもう一つ、駄目押しの一撃がありました。「止めの一言」とでも呼ぶべき、牧師の最後の言葉です。その先生は終わりにこう付け加えられたといます。「イエス様は、愛する者のために死なれたぞ」。つまり、「イエス・キリストは、愛する私たちのために命を献げてくださった。主イエスにとって、『愛する』とは、『あなたを愛する』と口にしたその相手のために命を献げて死ぬことだったではないか」と、そう言われたのでした。不倫もどきの恋愛云々をイエス・キリストの十字架の愛に 準えることには、どこか違和感を感じられるかもしれませんが、けれども、「愛する」ということの本質を考えるとという意味では、この先生の言葉は急所をズバリと突いた、明確で鋭い、そして重い言葉と言えはしないでしょうか。

主イエスは私たちに向かって、「あなたがたを愛する」と言ってくださいました。そして、口にされたその言葉のとおり、私たちのために命を献げ、十字架上に死んでくださいました。イエス・キリストにとって、「愛する」とは自分のすべてを懸けることであり、それほどに重く決定的なことでした。が、それはそもそも 何のためだったのでしょうか。ヨハネは記しています。「独り子を信じる者が一人も滅びないで・・・」。私たちが神の御子を信じ、そして一人として そこから滅びることのないように、そのためである、と言うのです。聖書で言う「滅びる (ἀπόλλυται <

「^{アポロリウミ}ἀπόλλυμι」とは、本来いるべき場所からいなくなって失われた存在になる、ということです。本来いるべき場所である、私たちを愛してやまない神の御許^{みもと}からいなくなり、迷い出て彷徨^{さまよ}う者になってしまう。そして、豊かないのちを見失い、どこか貧しく満たされない者となってしまいます。それが、「滅びる」という表現の底辺に流れる意味合いと言えるでしょう。ですから、私たちが一人として滅びないようにというのは、それは裏を返せば、私たちの誰一人として そのようになってほしくはないという、神様の熱い愛のほとぼしりにほかなりません。

実際、愛する人を失うということは、私たちが経験する最も悲しい出来事のように思われます。真実 愛する人を失ったとしたら、自分が死ぬ以上に辛^{つら}くいたたまれないことでしょう。息子さんを失った悲しみの中にいる一人の女性が、次のように語っていました。

私が耐えられなくて、憤りさえ感じたのは、「今は辛^{つら}いかもしれないけど、時間が解決するから」と、人の悲しみの深さも分からずに、安っぽい慰めの言葉をかけられたときです。カウンセラーと称する人たちの中には、「今は回復のこの段階で、次はこの段階に移り、そして 大体これこれの時間が経てば落ち着くでしょう」などと、自分の博識をひけらかし、それでこちらの慰めになったと思いついでいる人もいました。愛する者を失った傷というのは、時間が経てば経つほど、かえって深く重く疼^{うず}くんです。

神の御許^{みもと}から迷い出、寄^よる辺のない存在となってしまっている。元々いた場所を忘れ、豊かないのちの在り処から遠ざかってしまっている。私たちのそんな姿を、神様がもし御覧^みになったとしたらどうでしょうか。深い悲しみを憶えられるにちがいありません。神がその独り子イエス・キリストを世に送られたというのは まさに、そうした思いからではないでしょうか。それは、神様が愛する私たちを失う悲しみを真実 知っておられるからです。そのように、聖書は語るのです。

この愛の神様の姿を最も鮮やかに描き出しているのが、イエス・キリストの語られたあの有名な^{たと}譬^{ばなし}え話^{ほうとうむすこ}、「放蕩息子の譬え」です。御存じのとおり、ルカによる福音書の 15 章に記されています（ルカ 15：11～32）。主イエスのもたらされた父なる神のメッセージの本質を見事に伝えている譬えで、少なくとも 3 つの視点から取り上げねばならないほどに豊かな内容を持っていますが、ここではそのうちの 1 つの視点だけに絞って、改めて概略を御紹介することにしましょう。次のような内容です。

ある人に、二人の息子がいました。ある日、弟が父親に言います。「自分が受け取ることになっている財産の分け前を下さい」。こうして、弟は自分の分け前を貰^{もら}い、それを携えて 外国に旅立ちます。しかし、そこで放蕩^{ほうとう}の限りを尽くした弟は、持てる物のすべてを失ってしまいました。折も折、その地に厳しい飢饉^{ききん}が起こって 弟は食べるにも事欠くようになり、ついには ブタの食べる豆を食べてでも空腹を満たしたいときえ

思うようになります。そうこうして、話は終幕に向かいます。弟はギリギリのところまで我に返り、気づきます。「父の所に帰ろう」。そう思い返して家に帰ると、父親は遠くから息子を認め、自分のほうから走り寄って首を抱き、口づけをして、息子を家に迎え入れるのでした。そして、祝宴を用意し、息子の帰りを喜び祝いました。

「放蕩息子の譬え」の、弟息子と父親の部分のあらましです。ストーリー自体はごくシンプルで、誰もが容易に理解できることでしょう。ですが、ここで語られているメッセージは幾つかの点で、イエス・キリストの福音の核心を示すものとなっています。聖書の信仰の根っこを貫く、最も深いメッセージを語るものと言えるでしょうか。1つは、父親が息子を追いかけて、無理やり連れ戻しにはいかない、ということです。父親はただひたすら、息子の帰りを待ち続けます。本人が自分で気づいて帰るのでなければ、後を追いかけて、捕まえて連れ戻しても、かえって息子を決定的に失うことになることを知っているからです。信仰とは、本人の信仰として、自分で神と出会い、自分で告白するものでなければならないことを教えているのではないのでしょうか。2つ目は、父親はひたすら待ち続ける、ということです。父親はただただ、息子の帰りを待ち続けます。20節にこう記されています。「(息子が帰ってきたとき) まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて・・・走り寄って首を抱き、接吻した」。父親は毎日、家の外に出て、遠くを眺めては、帰ってくる息子の姿を探していたのでしょう。神もこのように、私たちが帰るのをひたすら待ち続けてくださっている。罰するためではなく、私たちが戻るべきところに戻り、神と共なるいのちと安らぎのそのところに憩うためです。事実、自分の過ちを謝罪する息子に対し、父親は一言も叱責の言葉を語っていません。そこに見るのは、息子の言葉など耳に入らないかのように、ただただうれしさに喜び、祝宴を開いて息子を迎える父親の姿です。これが3つ目の点です。神は私たちの帰りをこんなにも、手放しで喜んでくださる。いなくなっていた子が戻るからです。「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」(17)。ヨハネの救いの言葉は、このように、聖書の根っこを貫くイエス・キリストの福音の核心を伝えています。

自ら命を絶つ人々が年間3万人を超えたのが、32年前の1988年。3万1,734人という数を記録しました。各方面の取り組みもあって、その数は減りつつあるようですが、人の命が失われるというのはやはり、悲しいかぎりです。前述の五木さんは当時、「一万人ちょっとの人びとが一年間に亡くなって、それを<交通戦争>と呼ぶのなら、[これを] いったい、何戦争と呼べばいいのか」と言われました。未遂者まで入れたとしたら、どれほどの数になるのでしょうか。それだけではありません。さらに深く、内なる自分が自分の中で息をしていない人、心が生気を失っている人、生きる拠りどころがどこにもない人。例えば そうした人たちの数まで入れたら、その数はどこまで広がるか、見当もつきません。いのちの在り処、自分の居場所、生気の源・・・。それらはたしかに、いつの時代にも不可欠な、時代を超えた探しものと言えるように思います。

考えてみれば、私たちはそもそも、捨て置かれても文句の言えない存在なのかもしれません。その

ことは、この自分自身が誰よりもよく知っています。自らの足りなさ・好い加減さ・破れのあれこれは、誰に言われなくとも、この自分が一番よく知っている。なのに、そんな自分さえ、神はそのままにはしておかれなかった。それどころか、独り子を送って、御自身の思いを見えるようにしてくださいました。感じ取れるようにしてくださいました。十字架の上の主イエスのお姿は こうして、この私
がそのことに気づかされて、御自身の許に^{もと}戻るのを待ち続けられる愛の神様の御姿となったのでした。

「お与えになった (^{εδωκεν} < ^{διδωμι})」とは、贈り物として与える、無償で与える、ということです。貰った贈答品を包装し直して 別のところに回すというような、どうでもいい余り物をあげるのとは違います。自分の 懐^{ふところ}を痛めてこそ、本当の贈り物と言えるでしょう。自らの身を切ってこそ プレゼントであり、自分にとって価値あるもの、手放しがたいものを差し出してこそ、愛と言えるのだらうと思います。ヨハネが「神は、その独り子をお与えになった」と言うとき、まさにそのようなして、この私たちを愛するがゆえに 神が御子イエス・キリストを死に渡された、この私
たちを愛するがゆえに 主イエスが自ら十字架の上に上られた、と告げているわけです。願ひ事を叶えてくれたとか問題を解決してくれたとかいった そんなこととは比べものにならないほどの「奇跡の中の奇跡」がここにあるとは思われないでしょうか。神の愛の奇跡です。

神は、私たちに何か優れた点があるから、私たちを愛してくださるのではありません。神が私たちを愛してくださるのは、神御自身が愛のお方だからです。神は、私たちが自分の弱さや足りなさを克服して初めて、私たちを愛してくださるのではありません。神が私たちを愛してくださるのは、たとえどんな格好でいようと、私たちが御自分にとってかけがえのない存在だからです。ですから、神様は私たちを愛することを止められません。愛し続けてくださいます。アウグスチヌスという古代の教父は言いました。「神は、私たちの一人ひとりを、あたかもただ一人だけを愛するかの
ように愛したもう」。私たちは、空っぽの空手で、ただ素直になって思う存分、受ければよい。ただこの私だけのものであるかのようにして、思う存分、恵みの愛を受ければよいのです。

とはいうものの、それでもやはり、ある人々は言われるかもしれません。「そう言ったって、聖書にはやっぱり、裁きのことが書いてあるんじゃないですか?」。そのとおりです。聖書にはたしかに、いわゆる「裁き」のことが記されています。しかしながら、ここでもまた、聖書をきちんと読んで、的確に理解することが肝要のように思われます。ヨハネの言葉をよく注意して見ると、気づかされないでしょうか。18 節、「御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれています」。19 節、「光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている」。裁きについての言葉がそれぞれ、現在完了形（受動相）と現在形（能動相）で記されていることです。つまり、「既に裁かれています (^{ἤδη} ^{κέκριται})」と言って、それがすでに起こって 今もそうであること（現在完了）を語る一方、「もう裁きになっている (^{ἐστίν} ^{ἡ κρίσις})」と言って、それが今現在のことであること（現在）を

いま一度、述べています。そのようにして、どちらも先々の将来のこととしてではなく、「今・この時」の現実として言われているのです。そして、私はそこに、裁きという事柄のいかにも深い意味合いが暗示されているように思われています。

どういうことかという、例えば こんなことを言った人がいます。

太陽が日の光を注ぐのは、本来、影をつくるためではない。だが、それが光を通さない不透明なものに当たると、いや応なく、影が生まれる。影は、日の光から必然的に生じる副次的な一面と言えよう。「神の独り子が与えられた」ということと「裁きが存する」ということも、これと似ている。神が御子^{みこ}を世に遣わされたのは、御子によって世が救われるためである。しかし、光が射すとき、そこにはいや応なく、影が生まれる。

神が裁きをつくるのではなく、自身のあり方が闇をつくり出す、と語るものです。今・この時、ここで・すでに、それは生じる。それがヨハネの言葉の意味するところであり、その底に流れる実存的なメッセージではないでしょうか。

示唆に富む信仰の言葉を、あと一つ 御紹介しましょう。イエス・キリストを裏切った弟子のユダについて詠んだ短い詩ですが、深く鋭い視線がそこにはあります。銀貨 30 枚で主イエスを売った、あのイスカリオテのユダについてです。

今もなお 変わることなく、
人は自分で自分に値札を付けている。
銀貨 30 枚で ユダは売った、
キリストをではなく、自分自身を。

「銀貨 30 枚で ユダは売った、キリストをではなく、自分自身を」と詩人は言います。何を価値あるものと見、何を大切にしているか。何を尊いものとして、どんな人生を生きているか。そうしたことによって、私たちはたしかに、自分自身に値札を付け、自らの行く末を定めているように思われます。そしてそれは、「裁き」というものの最も奥深い、何より本質的で根本的な姿に思えてなりません。

そもそも、新約聖書が書かれた原語のギリシア語では、「裁く (クリネー^(イ) < κρίνω < κρίνω)」という言葉には「区別する」とか「選り分ける」とかいう意味合いがあります。つまり、神のほうからは、私たちが区別するようなことはされなかった。私たちを選り分けて「この人は救いに、この人は滅びに」と選別するようなことは、神のほうからはなされなかった、ということではないでしょうか。神はすべての私たちのために、すなわち一人も選り分けることなくこの私たちすべてのために、御子^{みこ}イエス・キリストをお与えくださった。主イエスもまた、一人も選り分けることなくこの私たちすべてのために、御自身^{みこ}を^{ささ}げてくださいましたのだと思います。そうまでしてくださったその神様とイエス・

キリストを用なしとして区別し、選り分け、そして捨て去るのはむしろ、この私たち・人間のほうではあるまいか。そう思われています。実際、しるしを見て 一時信じたように見えたユダヤの民衆も、結局はそのようにして、主イエスを捨てました。昼も夜も一緒にいて、誰よりも間近に、誰よりも親しく見えていたはずの弟子たちさえも、最後はそのようにして結局、主イエスのもとを離れていったのです。それらはたしかに、自分で自分に値札を付けるということであり、裁きということの原点を示唆しているように思われます。

これが、聖書の根っこを貫いて流れる「神の愛と裁き」ではないでしょうか。そこに流れるのはあくまでも、愛と恵みの水脈であり、救いの水脈です。繰り返すまでもなく、イエス・キリストが来てくださったのは神のお眼鏡に適う優等生のところにはありませんでした。気分屋で、勝手に、そして不信仰で定まらない私たちのところにでした。言葉を換えれば、そんな私たちだからこそ、来ねばならなかった。来てくださった。そのようにして、こんな私たちにもかかわらず、来てくださったのです。聖書の告げる「恵み」というのは、ここにこそ、その中心が示されているのではないのでしょうか。

ユダヤの民衆はそうこうして、イエス・キリストを捨てました。弟子たちもまた、結局は主イエスを置き去りにして、身を潜めました。しかしながら、ヨハネは一つ前の口語訳聖書の冒頭で、こう宣言しています。「光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった」(1:5)。現在の新共同訳で「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」と訳されている部分ですが、元々のギリシア語 (κατέλαβεν<καταλαμβάνω) とヨハネ福音書の特徴からして、ヨハネは両方の意味を込めてこれを記したものと考えられます。すなわち、「闇は光を理解せず、人々はイエス・キリストを蔑ろにした。しかし、光は闇に打ち勝ち、イエス・キリストは人々の主となった」。ヨハネはそう告げているのではないのでしょうか。そして、その言葉のとおり、ユダヤの民は後に主イエスを受け入れ、弟子たちもまた、主イエスの許へと戻っていきました。私たちもまた、繰り返し神を忘れ、その許を離れては彷徨い歩きます。けれども、神の御手はそこにもなお伸ばされてあり、気づいて立ち戻る私たちを温かく包んでくださいます。行き倒れの彷徨い人にならないよう、心が鈍くなって大切なことに気づかなくなってしまうまいやう、イエス・キリストの愛と恵みに何度でも目を向け直し、心を開き続ける者でありたいと願っています。

〔祈り〕

愛する神様。

2,000年前の初めのクリスマスのそのとき、独り子イエス・キリストを私たちのもとにお送りくださり、心から感謝いたします。そのようにしてどこまでも私たちを追い求めてくださり、感謝いたします。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一

人も減びないで、永遠の命を得るためである」

あなたから頂いたこの御言葉みことばを事あるごとに心に刻み、そこから繰り返し新しいいのちを頂くことができますように。困難や理解しがたい事態にみまわれるとき、そこにもなお、あなたの愛と恵みが変わることなくあることを思い起こさせてください。私たちの心をいつも、恵みのそのところに向けさせ、約束のそのところに立たせてくださいますように。

4月新年度が始まりました。この年、教会がこの救いの言葉によって互いにいたわあり合い、支え合っ
て励まし合う群れとなれますように。そして、すべてのいのちをかけがえのないものとして、これを
守り、育み、生み出してゆくことができますように。

主の御名によって願い、お祈りいたします。

アーメン